

三田村鳶魚翁と「明治・大正人物月旦」

菊池 明

一、はじめに

もう、六〇年近く前のこと、たしか、昭和二五年ごろであったと思う。その頃、筆者は三田村鳶魚翁の仕事の手伝いで、しばしば、世田谷太子堂の鳶魚翁のお宅を訪れていた。ある時、「君、濟まないが、これを野沢君のところへ届けてくれないか」と原稿の束を渡された。それが「明治大正人物月旦」の原稿であった。その時、一寸拾い読みしたが、じつに面白かった。それがいつまでも記憶にのこった。野沢純さんには後でも触れるが、大衆小説家で、戦時中山梨県疎開先で知り合い、それが縁で鳶魚の晩年を親身になつて世話をした人で、当時澁谷の桜丘に住んでいた。恐らくその原稿をどこか出版社へ紹介する積りだったのであろう。

しかし、この稿が雑誌『自警』に連載されはじめたのは、昭和二六年五月からで、その頃は鳶魚翁は夫人八重さんに先立たれ、山梨県西八代郡富里村の不二ホテルの高野さん方に身を寄せていた。そして鳶魚翁も翌年五月には亡くなり、その掲載も間もなく中断してしまつた。だが、あの原稿はまだあつた筈、長い間の疑問であつた。それが近年になつて、原稿は完全な形で不二ホテルに残っていることが分かつた。

このことを知らせて下さつたのは、上野悦子さんという方で、鳶魚翁の出身である八王子の千人同心を中心とした伝記的研究され、その調査をするうち、不二ホテルでこの資料に行き着いたものだった。上野さんのお話によると、戦中戦後の粗悪な原稿用紙を用い、升目はずし、裏にも記してある、粗悪なインクのため褪色もしている。早急にその保存、補修を講ずるとともに、これを世に紹介する手立てはないものかということであつた。

筆者としてはその前にまず、原本をコピーに取ることが先決と考えた。これに協力されたのが高野さんと親しく、本校文学部出身の仲澤一美さんで、ホテルにコピー機を持ち込んで作成された。そして、筆者はこの稿をパソコン入力するとともに、早稲田大学演劇博物館の学フロ研究に参加させて頂き、研究員として、ご両所と、早稲田大学図書館の松山薫、教育学部講師柳澤和子とともに、原稿の整理、校正、内容の研究にあたり、このほど、完了したものである。

二、「明治・大正 人物月旦」の概要とその成立

この稿は鳶魚翁が明治・大正期に会つた人物についての思いつくまを自由に率直に綴つたものである。政治家、軍人、実業家、学者、壮士、文人、芸能人、商人等あらゆる階層に及び、収録人物 九五名 原稿枚数(四百字詰) 三七七枚に及ぶ。

いずれも、著名人、大きな業績を挙げた人々だが、鳶魚はわざとそれには触れず、人間的な裏面を語ろうとしている。いきおい、猥雑、誹謗に終始したきらいがあるが、鳶魚の巻末

に添えられた跋文により、最晩年の鳶魚の心境を汲み取って頂きたい。

「書きつけて見れば百人にも足りない、尠くとも夢寤の間に彷彿する数は此に四五倍する思出はある。だが、称美するよりも誹謗するに忙しいやうにもなつた。悪る口の方が当人も、將た聞き手も面白い、人間と申すものゝ持ち合わせた興味でもある。しかし憎いと云ふが可愛い裏なら、可愛いといふのは憎いの表でなければならぬまい。唯だ言葉について廻つては、ある人のする川柳の講釈のやうではなからうか、それでは句意は何処にある、クイに引掛かつた古ふんどし、拾い上げるまでもないのか」

さて、この稿の成立年代だが、この頃の鳶魚日記が散逸しているため、正確には把握出来ない。しかし、原稿を検討することによって、ほどその推測が成り立つ。その内容は次の通りである。

天下の三奉行 内藤鳴雪 鳶魚自筆

『自警』「明治大正人物点描―よもやま綺談 三」（昭和二六・七）
者の字が離れない 井上頼因 鳶魚自筆

『自警』「明治大正人物点描―よもやま綺談 三」（昭和二六・七）
江戸生まれの田舎者 武内桂舟 鳶魚自筆

『自警』「明治大正人物点描―よもやま綺談 三」（昭和二六・七）
股引、腹掛の画師 歌川国松 鳶魚自筆

『自警』「明治大正人物点描―よもやま綺談 三」（昭和二六・七）
仙人の郵便貯金 国分青厓

『自警』「なくて七癖」 「遺稿鳶魚百話」 （昭和二七・一〇）
遅時ながら壮士講釈 伊藤仁太郎 鳶魚自筆

閨中明細記の朗読 南方熊楠 鳶魚自筆
『自警』「明細記の旦那」 「遺稿鳶魚百話」 （昭和二七・一〇）

これは又現金先生 杉浦重剛 鳶魚自筆
子規は到底田舎者 阪井久良岐 鳶魚自筆

出来損ねた情死の経験 島田三郎 鳶魚自筆
『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 一」（昭和二六・五）

爆撃の前夜は吉原 来島恒喜 鳶魚自筆
『自警』 「明治大正人物点描―よもやま談義 四 大隈と来島」 （昭和二六・八）

風面に描いた加藤清正 山岡鉄舟 鳶魚自筆
『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 二」（昭和二六・六）

書画の一番高い人 長三洲 鳶魚自筆
『自警』「明治大正人物点描―よもやま談義四 三州と鉄舟」 （昭和二六・八）

嬉がらせの名人 今北洪川 鳶魚自筆

- 西洋姓氏録の新撰 中川清次郎 鳶魚自筆
- 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・二)
 画にも描けぬ井伊直弼の顔 日下部鳴鶴 鳶魚自筆
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 四 日下部鳴鶴」(昭和二六・八)
 塩もん豆より砂利がいゝ 頭山満 『自警』掲載頁貼り込み
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 表題なし 四」(昭和二六・八)
 めん入りと綿入れ 坪内逍遙
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 四」(昭和二六・八)
 金婚式に紀伊の国 田辺太一
- 『自警』「表題なし」
 不時に地震製造 板垣退助
- 『自警』表題なし
- 尻癖の宜しくない 徳川家達
- 『自警』「十六代さま」 鳶魚百話の内尻癖二題 遺稿」(昭和二七・一一)
 ナメリアン人種 望月小太郎
- 『自警』「なめくじ小太郎」 鳶魚百話の内尻癖二題遺稿」(昭和二七・一一)
 売り物にしないよ 立花屋橋之助
- 『自警』表題なし
- 細君煩惱ではない 星亨
- 『自警』表題なし
- 大器大用の傑物 原敬
- 『自警』表題なし
- 鐘鬼様よろしく 岩館震平
- 『自警』表題なし
- 国士気取の小説家 小栗風葉
- 『自警』表題なし
- 愛妓は反り橋 中島半次郎 鳶魚自筆
- 屏風囲ひの中の四日 三遊亭円朝 鳶魚自筆
- 板垣伯を突き飛ばした壮士 金山米次郎 鳶魚自筆
- 打切飴を見て戦慄する 斎藤扇松 鳶魚自筆
- 黒焼屋の標本かと思ふ 池田蕉園 鳶魚自筆
- 蜜豆攻撃を傾聴する 与謝野晶子 鳶魚自筆
- 兆民先生の牽丸盃 中江篤介 鳶魚自筆
- 珍しいトンカチ屋の片手商売 吉田金兵衛 鳶魚自筆
- お間に合せるが大味噌 朝倉久兵衛 鳶魚自筆
- 藤田東湖を粉末にした 三宅雪嶺 鳶魚自筆

- 裏天とは真に名按 加藤政之助 鳶魚自筆
 薬価は取らぬと威張る 浅田宗伯 鳶魚自筆
 十年辛抱したら御雇になつた 島田南村 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・六)
 紅葉門下の貧乏鬮 村山鳥逕 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・三)
 博士になれば細君も更迭 高野辰之 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・三)
 親が朝臣したので離縁 山中共古 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・三)
 岩公は奸物だから斬らう 伊丹鉄弥 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・四)
 儲からぬことはせぬが商人 安田善次郎 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・四)
 手帳に妾宅の旗日 渋沢栄一 鳶魚自筆
 江戸操りの名残り 吉田冠十郎 鳶魚自筆
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・六)
 高輪はウエルカム 武藤山治 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・二)
 奸物はいたづら書生 高松凌雲 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物月旦 鳶魚百話」(昭和二七・二)
 抜け裏のやうな人 真山青果 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 持つたが病の御師家さん 勝峰大徹 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 生まれついた半道鼻たき 大倉喜八郎 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 役者らしくない行儀 中村歌右衛門 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物点描―よもやま綺談 三二(昭和二六・七)
 認めばん一握み 石坂昌孝 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 題名なし 林包明 宵曲筆記
 踊にすれば当振 嶋本仲道 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物月旦―よもやま談義」(昭和二六・九)
 赤い金巾で拵へた松茸 中嶋湘煙 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物月旦―よもやま談義」(昭和二六・九)
 親に似た所もある 山岡直記 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 職人氣質の古本屋 吉田吉五郎 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 棟割の殿様長屋 芝亭実忠 宵曲筆記(表題は鳶魚自筆)
 『自警』「明治大正人物月旦―よもやま談義」(昭和二六・九)

- 爪を隠す鷹Ⅱ岡本綺堂 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 女の惚れない者は成功せずⅡ後藤象二郎 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「女の惚れない者は成功しない」 「明治大正人物月旦―よもやま談義」 (昭和二六・九)
- 六・九)
- 資本屋仕込の学問Ⅱ饗庭篁村 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 九」 (昭和二六・九)
- 胸気は学者先生Ⅱ黒板勝美 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 一〇」 (昭和二六・一〇)
- 金平人形も跣足な恰好Ⅱ上田萬年 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 大石の銭勘定に歎服するⅡ福本日南 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 篁村宗の一人Ⅱ横川勇次 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 初代の放送部長Ⅱ服部愿夫 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 横柄づくで押して行くⅡ松居松翁 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 独立独行の妨碍者Ⅱ千葉亀雄 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 花嫁に相済まぬⅡ住谷穆 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 条件付の遊学資金Ⅱ中里介山 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 操觚者中での果報者Ⅱ伊原青々園 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 小御所会議の最年少者Ⅱ浅野長勲 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談 一一」 (昭和二六・一一)
- 策略ないやうに見へるⅡ中井錦城 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 御勿体をつけた様子Ⅱ三上参次 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 懺悔懺悔の対象Ⅱ杉野喜精 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 日向まわりの人Ⅱ内田魯庵 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 生き仏様のアムハラバⅡ西田和協 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 晴雨の知らぬ恋の昼間Ⅱ朝倉無声 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 音のいゝ法螺を吹くⅡ山口剛 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 歌麿は決して上手ではないⅡ和田維四郎 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 題名なしⅡ岩井糸八 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 按摩剣術と徳利水練Ⅱ亀田雲鵬 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま奇談」 (昭和二六・一一)
- 題名なしⅡ横田金馬 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 吉原かぶりで細見売Ⅱ長尾藻城 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物月旦―よもやま義談」 (昭和二六・一二)
- 一杯機嫌で俱舎唯識Ⅱ岩瀬謙超 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
- 『自警』「明治大正人物点描―よもやま談義」 (昭和二七・一)
- 白髪のはへた桃太郎Ⅱ志賀重昂 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)

『自警』「明治大正人物月旦 よもやま談義」(昭和二七・一)
何処迄もつ罪のない 伊東知也 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
題名なし 田中舎身 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
題名なし 和田萬吉 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
ジツとして居られぬ 徳川慶喜 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
詩人から高利貸 岡田玄寿 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
禅僧のやうな大阿闍黎 権田雷斧 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)
渾名は立泳ぎ 松村琴叟 宵曲筆記 (表題は鳶魚自筆)

* なお、『自警』掲載の年月は、国立国会図書館の蔵書に拠ったが、欠号があり、それらは警視庁内財団法人自警会にあるが、内部の会報として非公開のよしで、この稿にはデータとして記入出来なかった。

以上がその概要である。

表題はすべて鳶魚自筆だが、この稿が最初『自警』に掲載されたときは、人名のみで、表題のないものもあり、宵曲筆記の稿には鳶魚が編集の際書き入れている。また、原稿は前半は鳶魚自身が書いているが、後半は柴田宵曲(一八九七—一九六六)の口述筆記となっている。宵曲は俳人で、子規研究家として多数の編著があるが、江戸研究家として、鳶魚と親交があり、その口述を筆記して鳶魚の著作に協力した人である。また、原稿の一部は『自警』掲載の紙面を利用しているが、その掲載が始まったのは、鳶魚が妻八重を失って山梨県西八代郡下部の不二ホテルに移ってから昭和二六年六月であるから、鳶魚の編集の年代と場所の推定に役立つ。

こうして、あれこれ想像すると、鳶魚は昭和二四、五年頃この稿を思い立ち、順序不同、思い出すままに書付けたが、野沢純の斡旋で『自警』に掲載することになり、その原稿を野沢あるいは出版社にとどけた。鳶魚没後も『自警』に遺稿として掲載されたのはそのためであろう。

それとは別に、鳶魚は出版を目的として、宵曲の協力を得て執筆を急ぎ、二六年頃一応の枚数に達したと考えられる。勿論、不二ホテルに移ってからでも鳶魚はここで原稿を書き足しも行っている。野沢宛の書簡にも、いま徳川慶喜の事を書いていと記されている。そして、『自警』や宵曲筆記稿に訂正や書き入れを行い、表題を付し、あとがきまで書き、完成させた。

なお、鳶魚はこの著に仏文学者辰野隆の序文を求めたものとみえ、その辰野からの昭和二八年八月二八日付の原稿が不二ホテルに残されていた。以下その稿を左に掲げておく。

序

三田村翁の名を初めて知ったのは、私が学生時代に常に愛読してゐた「日本及日本人」

誌上であった。雪嶺の評論や如是閑の特異な小説とともに、翁の江戸時代の風俗習慣に
関する該博な知識や懐古談を耽読したのであった。その後、「日本及日本人」は廃刊し
たが、翁の書かれるものは、種々の雑誌で、断続的に愛読してゐた。

本書は、明治大正昭和三代に互る各界の知名の人士―実に多岐な顔ぶれである―に就
いて、翁が軽い気持ちでものされた語り草であり、側面観でもある。敢て強弁甚解を避
けて、見たまま聞いたままを、茶を啜りながら、煙草をのみながら、語って自ら怡とこ
ろに本書の生命があり、趣味が深いのである。

昨年、安藤昌益に関して立派な研究をしたカナダ代表のノーマン氏から、私は誰か江
戸時代の世相人情に精しい市井の学者を紹介されたいと頼まれた。そこで、私は旧友神
鞭常泰君を介して、三田村翁を推挽したのである。爾来、翁とノーマン氏の会談は数回
に及び、私はノーマン氏からは、生きた史実に精通する代表的人物を紹介したことを感
謝され、翁からは、海彼岸の博雅の君子と相知った悦びを感謝され、却って恐縮した次
第である。聞くところに依ると、ノーマン氏は職務上、近く帰国され、再度の来朝は必
しも期しがたく、翁も亦高齢であるから、両者の会談は未だ尽きずして了ることになる
のではなからうか。私は心からノーマン氏の再度の訪日と翁のいやが上の長寿とを祈念
してやまぬのである。

昭和廿五年八月廿八日

辰野隆

翻刻にあたっては、原文は人物の掲載順序が不統一であるため、五〇首順とし、かつ表題
をその下においた。また、漢字は原則として常用字体とし、仮名遣いは原文のまま、ふりが
なは原文にあるもののみ採用した。

三、 鳶魚翁の思い出

はじめて鳶魚先生にお目にかかったのは、昭和二二年三月、早稲田大学文学部芸術科一年の時
であった。演劇博物館館長の河竹繁俊先生からのお話で、「君、今度、三田村さんが、『江戸語彙』
を編纂することになったが、手伝いが欲しいそうだ。行ってみないか？」ということであった。いまは、
江戸言葉の辞典は幾種か出ているが、当時としては画期的な企画であった。出版社は北光書房、
これは浮世絵研究家の吉田暎二さんの会社で、演劇博物館から歌舞伎や浄瑠璃の文献集成など
出していた。筆者は二つ返事でお引受けすることにした。

当時、三田村翁にはお子様がないので、奥様と二人、武蔵小金井の笹本寅氏宅に寄寓されて
いた。笹本氏は中里介山の著作を刊行した出版社出身のジャーナリスト、小説家であった。その
お宅での初対面は、今なお、まさまざと思ひ出す。その前に河竹先生から「三田村さんは名代の
氣むずかしやだ、玄閑で下駄の脱ぎようが悪いといつて、追ひ返された人がある。氣をつけるよう
に」といふ注意は受けてはいたが、大学一年の若輩者ではどう氣をつけようもない。ただおぼずと
おとなうばかりである。

ご夫妻の居間は庭に面した日当たりのよい六畳の間で、周囲は和式の本箱が鴨居に上まで積み上げられている。けんどんが有ったり無かったり、地震でもあったらどうなるだろうという有様。なかは殆ど茶表紙の和綴しの稿本ばかり、あとで分かったことだが、これが例の『含苞』という翁の歴大な手控えノートであった。活字本は殆ど見当たらない。恐らく戦時中の疎開、仮寓をされるうちに処分されたのであろう。片隅に小さな机があり、ここに灰皿や湯呑が置いてあり、真中に炬燵があり、ここに翁が坐っておられた。

翁はこの時七十七歳。痩せ型、長身、やや面長で、半白の髪を短く切つてある。あご髭、口髭、長い白い眉。目蓋は垂れ下がっていて、その奥の白眼がちの眼は鋭かった。しかし、どこか優しさがあつて、人の言うような、厳しさや恐さはあまり感じられなかった。煙草はお好きだと見えて、巻煙草を三分の一ぐらいに切つたのが空缶に入っていて、これを煙管に詰めてしきりと吞まれていた。

さて、初対面の挨拶がすむと、いきなり、茶表紙の和綴の稿本二冊を渡された。見ると表紙に「新吉原語彙」とあり、なかは吉原に関する言葉とその出典が記されており、その出典から、言葉の前後を書き抜くということであった。五、六百もあつたらうか。『江戸語彙』についての構想、編集方針の説明など一切なしで、ただ、「言葉の意味が分かるように書いてくれ、いくら長くてもかまわない」ということであつた。そこで図書館へ通つて原稿を作り、少し溜まると持つてゆく、すると翁は「やあ、どうも」といつてしまふ、如何にもあつけない。そんな日々が続いた。

しかし、ひところは、関西から近世文芸の研究者忍頂寺務さんを招いて作業をされていたが、出版社の事情か、別のことがわからないが、いつしかその進行が鈍くなり、翁自身もあまり口になされることなく、中断してしまつた。

その後の処理をされたのは河竹先生で、演劇博物館内に江戸語彙研究会を組織、守随憲治、大久保忠国、それに筆者も加わり、文部省からの研究費で継続した。が、格別の成果もなく終つた。現在「江戸語彙」の原稿、「含苞」が演劇博物館にあるのはその縁である。

もともと鳶魚翁と早稲田、逍遙、河竹先生とは縁の深いものがある。翁は若い頃、三多摩の自由民権運動の壮士で、明治二十二年十月、大隈重信を襲撃した来島恒喜の一味であつたという。柴田宵曲さんの私の直話によると、大隈さんは閣議を終えて、桜田門から霞ヶ関の外務省の構内に入ろうとした時、来島に爆弾を投げられた。その馬車が来るのを坂の上から手を振つて合図をしたのが、若き日の三田村青年であるという。勿論逮捕、その逮捕のことは新聞記事にあるから確かなことであろう。間もなく釈放されたが、それは大隈さんが将来のある若者だから許してやれといったのが釈放のきっかけであつたとのこと、それで早稲田が好きになつたのではないかとのことだつた。

また翁の写真嫌いは有名だが、逮捕された時警察で写真をとられたのが原因ですとも言つておられた。翁自身はそれに就いて全く語っていないが、「人物月旦」では、来島は罪を一人で引受けて死んだと意味ありげな書き方をしてある。

逍遙に翁を紹介したのは、逍遙の側近の山田清作であつた。翁は若い頃、上野の吉祥院に寄寓して学んだが、そこで、山田の弟で円童といった僧に世話になつた。そのひとが寺で不始末を起こして寺を追われた時、翁は、ご自分の親戚で、陸軍の軍用鳩（伝書鳩）の係りであつた井崎という中尉

に頼み仕事を幹旋した。山田はその恩義から鳶魚翁に稀書複製会や『未刊随筆百種』の仕事を差し向け、また逍遙を紹介したという。

その最初の出会いは大正六年、早大出版部で『近世実録全書』全二十巻を、逍遙の監修、河竹繁俊の編集で刊行することになり、翁をその顧問として、江戸についての該博を仰ぐことになったときからである。以来、翁は深く逍遙を敬愛し親交を結び、逍遙の豊国研究や戯曲「近世畸人伝」の執筆に資料を提供、また逍遙も翁の著書に懇切な序文を寄せている。逍遙が亡くなった時、逍遙の自分宛の書簡を演劇博物館にすべて寄贈したが、その時、鳶魚翁は逍遙夫人から贈られたという菓子空き箱に収め、このよしを山田清作に箱書きをして貰い、演劇博物館に届けている。その箱は現在も館に保存されているが、このことからしても逍遙へのなみなみならぬ敬愛の情が窺える。河竹繁俊先生との交流もその時からで、翁は惜しみなく江戸の知識、資料を提供、河竹先生もまた親身になって翁の世話をされていた。

筆者が三田村翁に接した期間は二十二年から亡くなるまでの四、五年に過ぎず、二十台の若輩者では学問的にはどうといったお手伝いも出来なかったが、出来るだけ身辺の御用を勤め、外出のお供をした。あの有名な「西鶴輪講」にも陪席したが、流石貫禄で、翁は正面の床の間を背にピタリとすわる。はじめに森銑三さんがまず原文を読み、簡単な解釈をされる。終ると翁が大きな声で明快に意見を述べられる、殆どメモらしきものはない、そのあと、出席者が意見を言う、それを柴田宵曲さんが筆記をするという段取りだった。宵曲さんの筆記は所謂速記ではなく、独特なもので、ちよつとみてもなにか書いてあるかわからない。それが暫くすると、堂々たる原稿になって完成するのであった。翁の著作はこの柴田さんの筆記に寄ったものが多い、現に「人物月旦」にも送った原稿が沢山ある。

また、翁のラジオ放送にもお供したことがある。「江戸の春」という題であったように思うが、当時はたしか生放送時代で、話を終えたとたんに「まあこんなもんです、いかがでしょう」と、終了のアナウンスの前に、大きな声で言われたので、局の人があわてたことを覚えている。

筆者がお宅に伺うようになってから暫くして、「僕は金がないから君にしてあげることが出来ない。ひとつ『柳多留』を講義をしよう」ということになり、翁と差し向かいの勉強となった。翁が一句ずつ解釈をする、それを一生懸命筆記する、一日三時間位だが、それでも第十七篇ぐらいまでは進んだろう。翁はときどき途中で話しを止めて、短冊形に切った紙切れに何やら書いている。おそらく「江戸語彙」のためのものだったのだろう。

翁の煙草好きは白い髭が黄色く染まるほどだったが、その頃筆者もやはり呑んでいたから、二人でぶかぶかやっていたが、あるとき、煙草を忘れてお宅に伺ったことがある。まさかお先煙草というわけにもゆかず、もじもじしていると、翁は急に、「君、煙草を止めたのかい？ えらいね。僕は何度も止めようとしたが、出来なかった。君は偉い」と、たまたま、傍に居あわせた客にまで、「この人は偉い」と、大変なお褒めのお言葉で、それ以来もう三田村先生の前では、煙草は呑めなくなりました。お宅を出て、駅のベンチで一服やったときのうまかったこと、いまは懐かしい思い出である。

また先生は怖い、厳しいといわれた翁であるが、どこか、純粹で、誠実で、またユーモラスところが

あつて、筆者には恐さは感じられなかった。翁は奥さんを「ハゼさん、ハゼさん」とよんでいた。ご本名は八重とおっしゃるのに不審に思っていたが、これは奥様のお顔がハゼに似ているからという渾名なのだそう。不二ホテルで身の回りを世話をするお手伝いさんを「メバルさん」と呼んでいたとか。翁にはたしかにこうしたユーモラスな一面があつたのである。

晩年の翁と親しかった人々のうち、筆者が存じ上げている方々は、河竹繁俊、柴田宵曲、忍頂寺務、海音寺潮五郎、井伏鱒二、野沢純、中沢丕夫、松尾義明、岡本経一氏などがある。

海音寺氏には翁のお宅でお目にかかったが、袴を付け微動だにしない風情で話をされる。なにか古武士の佛を感じさせる方だった。不二ホテルの庭中に建つ「三田村鳶魚終焉之地」の碑の碑面、碑陰の撰文揮毫は海音寺氏の筆である。

忍頂寺氏は関西の江戸文芸研究で、「江戸語彙」編纂のため翁の宅に寄寓されていた方。

野沢純さんは赤ら顔で、大きな声で話をされる、気さくな方だった。翁が昭和二〇年四月、山梨県西八代郡波高島の不二ホテルに疎開されたとき、ご自分もそこに疎開して知り合った。当時の翁の日記によると、随所に野沢との交流の記事が出てくる。終戦後亡くなるまでも親身になつて世話をされた。いやその没後もその遺著の出版に尽力。そのほか河竹先生や筆者も参加して「三田村鳶魚著作刊行会」を立ち上げたこともある。

また疎開当時、井伏氏を翁に紹介したのも野沢氏で、井伏氏はのち翁との交友を綴った「丸木橋」という随筆を書いている。昭和四三年五月、不二ホテルに翁の石碑が建立されたその除幕式の時、釣り姿で参列され、思い出を語られた。

松尾氏は大森の海苔の仕事された方、翁とはやはり疎開先の知り合いで、翁の日記にも登場、そこで、「末摘花」の講読などをしている。戦後も翁は松尾氏の葉山の別荘に訪れているが、筆者も翁のお供をして「末摘花」の講読を承ったことがある。

岡本さんは綺堂の「養子」だが、出版社青蛙房を経営、戦後、翁の著作を最も多く出版された。その最初の仕事はシベリヤから復員間もない昭和二三年六月、鳶魚著『女の生活』であった。売行きが悪かったときだったが、鳶魚先生としても戦後最初の出版なので大喜び、筆者も贈与にあづかり、「君、出来たよ、出来たよ」と、いかにもお嬉しそうだった。